

普仏戦争の勃発Ⅱ

— 独仏間の新たな遺恨の始まり —

松 井 道 昭

第1章 ザールブリュッケンの戦い（8月2日）

普仏戦争は、フランスが新興国プロイセンによって強いられた戦いである。普墺戦争（1866年6－8月）を勝ち抜いたプロイセンは、ドイツ統一の悲願を達成する途上で最後の障害となるフランスとの激突を不可避とみて、着々と戦備体制を整えていた。1870年春、勝算ありとみたプロイセン宰相ビスマルクは「エムス事件」を惹き起こし、宿敵を首尾よく開戦に導いた。フランス政府は7月15日、対プロイセン開戦を決議し、プロイセンも、これに応じるかたちで宣戦布告を出した（19日）。

本論考では、前に発表した拙論考「普仏戦争の勃発Ⅰ—集团的熱狂の綺想曲—」¹に引きつづき、緒戦での普仏両国の戦いぶりについて述べることにしたい。

フランスは挑発に乗って開戦に踏みきったわけだが、最初から不利を承知していたのではない。結果から判断して作戦計画・戦備体制・動員力・士気・諜報活動などいずれの点を取ってみても、プロイセン側に一日の長があった。だが、実際に戦端が開かれるまではフランスとドイツの世論、ヨーロッパの世論のいずれも、フランスの苦戦をまったく想定していなかった。ひとつだけ例外があるとするれば、それはプロイセンの首脳部であった。

参謀総長モルトケは最初から自信満々であった。前線に出た兵力をみると、仏軍が25万（実勢20万）に対し、独軍は48万を数えた。じっさい、モ

1 『横浜市立大学論叢』人文科学系列59巻、第1・2合併号、2008年。

ルトケは、実戦に臨み敵方の準備がこれほどに遅れているとは想定していなかった。だからこそ、彼は慎重にも敵の奇襲に備え、第2軍を一旦後退させ、安全を確かめたのち時間をおいて進軍を命じたのであった。ところが、いくら経っても敵がまったく姿を現わさないため、本来ならば後衛ないしは“おとり役”をつとめるはずの第2軍までがさっさと前に出てしまった。これはある意味でモルトケの“誤算”だった。これをたとえると、素人将棋にプロが相手をつとめたときのような戸惑いといえようか。敵兵力を侮るあまり、第2軍が勝手に飛び出したため、緒戦のシュピッヘルンで苦杯を喫することになるが、さりとて、戦争の行方を左右するほどの痛手とはならず、直後の戦勝でもって失敗を簡単に帳消しにしてしまう。

ここで、少しばかり時計の針を逆にまわし、仏軍の動向を見ておくことにしよう。

皇帝ナポレオン三世は7月28日夕方7時にメッスに到着し、その日のうちに兵士に対し、「各人はその義務を全うせよ。神の加護あらん！」という主旨の檄文を発表した²。同皇帝が総司令官に就任するのは2日後である。

7月30日、参謀総長ルブーフは全軍に対し、メッス～ザールブリュッケンの鉄道線に沿って菱形の陣形をとるよう命じた。攻撃目標はザールブリュッケン、31日朝より進軍を開始し、8月2日午前中に攻撃に移るということだった³。先鋒は第2軍団がつとめ、第3軍団がこれを追い、この2つの軍団が攻撃の軸となる。左翼は、ブーレー近辺にいる第4軍団が、右

2 D'Heylli, Georges, *Journal du siège de Paris: décrets, proclamations, circulaires rapports, notes, renseignements, documents divers officiels et autres*, tome 1: Du 6 juillet au 1er octobre 1870, clxxxi, 476 p., p. lxx.

3 この命令は、皇帝がパリを脱出する前の22日に前線総司令官ルブーフに送った指令に基づくものらしい。ルブーフは、30日に総司令官の地位に就いた皇帝の裁可を得たうえ、仏軍大本營の名においてこの命令を下した。ということは、皇帝がこの攻撃計画をかなり前から温めていたことを意味する。Cf. Hérisson le Comte d', *Les responsabilités de l'Année terrible*, Paul Ollendorff, 1891, 384 p., p.18-22.

翼は、サルグミーヌにいる第5軍団がそれぞれ受けもつことになった⁴。

しかし、7月31日から始まる進軍はただ前に少しばかり進んだだけのことでしかなく、とても攻勢に出るどころではなかった。各軍団司令部は大本営に矢継ぎ早に基本的装備と物資の不足ぶり⁵を訴えてきたし、士官は編制不備を罵るばかりだったからだ⁶。各師団を連携進軍させる試みはなされなかったけれども、縦列が崩れなかったことと、進み方があまりに緩慢だったため落伍者を出さなかったことが不幸中の幸いであった。各軍団は16キロメートル以内の距離を保ちながら進む。先頭の師団は午前9時前の出発だが、最後尾の大隊が出発したのは正午過ぎになった。この大隊が目的地に到達したとき、すでにとっぷり日は暮れていた。

それでも、士官たちは元気だった。「われわれはいずれライン川を渡るであろうし、フランクフルト付近で会戦するだろう」⁷、と。だが、兵士とくに予備役兵は違った。シャコー帽⁸を被せられ汗まみれになった彼らは、不慣れた装備の重さで前屈みになって、夏の土砂降りの中をとぼとぼ歩かねばならなかった⁹。

7月31日に開かれた大本営会議で作戦の段取りが決められた。参席したバゼーヌは「テュレンヌ¹⁰の時代の戦法に倣うのか」という印象を記して

4 Howard, Michael, *The Franco-Prussian War*, Routledge, 2001, xiv, 512 p., p.80.

5 Grand Etat-Major prussien, *La Guerre franco-allemande de 1870-71*, Traduction par le chef d'escadron, E. Costa de Serda, de l'Etat-Major français, 1876, tome I, p.64, p.84, p.194.

6 Howard, *ibid.*, p.80.

7 *Ibid.*

8 円筒形前立て付き軍帽。

9 Lehautcourt, Pierre, *Guerre de 1870, Aperçu et commentaires*, tome 2: Les armées de la Défense nationale, Berger-Livruault, 1910, 408 p., pp.338-389.

10 ルイ十四世時代の仏軍の名将アンリ・テュレンヌ（1611-75年）。彼は晩年にパラティナを経てアルザスに侵入し、勝利をおさめたことがあった。仏軍の今度の進軍経路とは逆のコースをたどったのである。

いる。会議は8月2日の攻撃開始を再確認し、目標をザール川左岸の制圧に置いた。この地点を抑えれば敵の鉄道運輸を麻痺させることができるというのだ¹¹。

はたして、8月2日午前11時、ザールブリュッケンで小競り合いが始まった。フロサール指揮下のフランス第2軍団3万5千が先制攻撃を仕掛け、交戦1時間でザール川左岸を制圧し、敵兵を右岸に撃退した¹²。フランス側に73人、ドイツ側に75人の損失が出た。うち、死者はそれぞれ6人と2人である¹³。フランスが先に国境を越えて攻撃したところに意味があった。というより、意味が込められた。この日、ナポレオン三世と皇太子が直々にザールブリュッケンまで視察に出かけた。味方の最高指揮官が国境を越えて敵の領土を踏みしめたものだから、その事実はパリで、「わが軍は攻勢をかけ、国境を越え、プロイセンの領土内に侵入した」¹⁴（『官報』8月3日）と、誇張されて報道された。

モルトケにとってザールブリュッケンで守勢に立つことは計算ずみだった。彼は独軍の3個歩兵大隊、4個騎兵中隊、1個砲兵中隊でもって、仏軍の3個軍団と渡りあうのはとうてい無理とみていた¹⁵。それゆえ、自軍の撤退を当然視していたのである。準備が整うまで決戦を避けただけのことである。むしろ、敵がこの勝利を足場に、なぜ追撃してこなかったのかを訝しく思ったほどである。モルトケ『回想録』は、仏軍はわが軍の配置と作戦計画を知らなかったため、疑心暗鬼に陥ったのではないかと述べている¹⁶。モルトケの主たる関心は、敵が引きつづき攻撃をかけてくるかどうか

11 Hérissou le Comte d' , *ibid.*, p.22.

12 *Ibid.*

13 Howard, *ibid.*, p.81. ; Armagnac, L., *Quinze jours de campagne (août-septembre 1870), étape d'un franc-tireur parisien de Paris, à Sedan*, Hachette, 1884, 189p, p.31.

14 Sordet, Félix, *1870-71 ou une page d'histoire*, Sordet-Montalan, 1873, 452 p., p.73.

15 Moltke, *ibid.*, p.13.

16 *Ibid.*, p.13.

かであり、それに備え、第1軍を速やかに稼動できる状態にすることだった。

当の第1軍は7月31日付で、ヴァーデルン～ロスハイムの線に集結するよう命令を受けていた。つづいて8月4日にも、同軍はトレーに集結し、そこで待機せよという命令を受け取った。それによると、もし単独で敵の大軍と渡りあって押されぎみになったとき、あるいは、もし敵が意外にも第2軍を急襲し、同軍がパラティナの森林地帯から脱出できなくなったときは、第1軍が救援に駆けつけて敵と会戦する、という内容だった¹⁷。

ところが、第1軍参謀長フォン・シュタインメッツ將軍は待機にも救援にも反対だった。同將軍は8月4日、マインツの大本営（モルトケ）に対し説明を求めてきた。第1・第2・第3軍の同時発進を計画していたモルトケは第1軍に待機を命じたのだが、それは前述のように、第3軍の到着が遅れていたからである¹⁸。モルトケがそうした趣旨の回答を準備している間に、シュタインメッツは上からの指示を待つことなく、シュピッヘルンで敵影を認めるや、自軍に出撃を命じてしまった。彼がそうしたのは、当初の作戦計画で防御戦を主務とするはずの第2軍の進軍が予想外に速く第1軍に追いつきそうになり、国境越え先陣取りの栄光を第2軍にさらわれそうな状況になったからである。

ここで視点をメッスのフランス軍総司令部に移してみよう。シュピッヘルンは、ザールブリュッケンとフォルバックの中間に位置する仏領内の高地である。ザール川から崖を成して聳え立つこの高地からは、眼下のザールブリュッケンはむろん、数十キロメートルも離れたパラティナ平原を見渡すことができる。ここは出撃に備えての待機地としてもってこいの場所

17 *Ibid.*, p.14.

18 モルトケ『回想録』はシュタインメッツ將軍の違反行為について詳しくふれていない。それは、部下を責めずというモルトケの人柄の一面をあらわしているようだ。

だった。

メッスにいるナポレオンとルプーフの意図は、ザールブリュッケンで勝利をおさめたのち第2軍団と第3軍団を前進させ、第4軍団をザールルイス方向に進めることによって、ザール溪谷全体を制圧することだった。仏軍首脳部が緒戦での勝利を足場に即座の追撃戦に転じなかった理由は、もともとその突破作戦そのものが杜撰な計画だったせいもあるが、それとは別に、自軍兵士の疲労が激しく¹⁹、装備不全を思い知らされたからである。そして、命令を受ける前線の立場からみると、メッス大本営が矢継ぎ早に送ってくる命令が行軍秩序・野営方法・安全確認・服装など、どうでもよいことばかりで、肝心かなめの作戦計画や敵・味方軍の配置について何らの情報をもたさなため、各軍団司令部は疑心暗鬼に陥っていた²⁰。こうして、各軍団は旅行者の情報を便りにするしかなかった。情報もない、地図もない状態で、泥濘化した一本道を進むのは非常に危険だった。しかも、欠食あたりまえ、寝具も不十分、暖を取るにも不自由な状態では、兵士が戦意をなくすのは無理もない。それゆえに、安全な場所で兵をしばらく休養させるしかなく、選ばれた待機場所がシュピッヘルン高地なのであった。

メッスで実行可能と思われたことは、ブーレーに駐留する仏軍左翼（第4軍団）のラドミロー将軍には不可能事に思えた。彼の許に届いたルクセンブルクからの情報によれば、4万ほどの独軍がトリエルを発ってモーゼル川を南進しているとのことだった。まもなく独軍はティオンヴィルに達するであろう。もしメッス大本営の命じるままに自軍をザールルイスの方向に進めれば、ティオンヴィルから左方に転進した敵に背後を突かれるこ

19 8月1日から2日にかけて襲った激しい夜雨が野営中の兵士を不眠状態に陥れた。それは、重い荷物を背負っての不慣れな2日間の行軍による疲れを倍加させた。

20 Howard, *ibid.*, pp.85-86.

とになる。そこで、ラドミローは自分の責任において1個師団をシエルク(ティオンヴィルの北東方20キロメートル、ブーレーの北方40キロメートル)に派遣し、モーゼル川を塞ぐことにした。第4軍団をこのように分割するとなると、メッスが指示するところの、ザールルイスに向けての進軍は不可能となってしまう²¹。

メッス総司令部は8月4日、配下の斥候を通してだけでなく、独軍に従っていた英国の通信員からも、ザールブリュッケンの北方に独軍が集結している事実をつかんだ。そこで、ラドミロー第4軍団への指示を取り消し、ザールブリュッケンにいるバゼーヌ指揮下の仏軍の背後に兵を集中し、そこで差し迫った攻撃に備えよと命令した。ところが、ラドミローはモーゼル峡谷にこだわり、転進命令に従おうとしない。ナポレオン三世はラドミローの許にルブラン將軍を派遣して状況を調査させた。戻ってきたルブランがラドミローの主張の正当性を認めたため、またも方針転換し、ラドミロー軍団をモーゼル溪谷の防備に専念させることにした。第3軍団はフォルバックの後方で第2軍団の支援にまわった²²。

ラドミローがいうところのモーゼル峡谷の脅威は本当は幻でしかなく、前にみたように、独軍右翼(第1軍=シュタインメッツ軍)の主力はザールブリュッケンの西北方に移動し、第2軍と先陣争いをしていたのだ。ラドミローはこのようにして、8月2日に生じた追撃の好機を奪うことになった。ラドミロー軍団は自軍主力から離れた場所に駐留し、無為な日々を過ごすことになる。

ピッチュにいる第5軍団(ファイイ將軍)の一部は二度目のザールブリュッケン戦に備えてサルグミーヌに移動させられ、第3軍団の右翼と接するにいたった。こうして、第5軍団の防備線はヴォージュ山脈越しに長く引っ張られることになった。

21 *Ibid.*, p.85.

22 *Ibid.*, p.86.

8月5日の両軍の陣形をみると、まったく好対照をなしている。すなわち、仏軍が、孤立しているラドミロー軍団を除き、ロレーヌからアルザスの国境線沿いに長い防備線を張っているのに対し、独軍はザールブリュッケンの北方に第1軍と第2軍、ウィサンブールの北方に第3軍がそれぞれ塊となっている²³。陣形からみて明らかにドイツ側が有利である。なぜこのような違いが出たかという、作戦計画の精密さ、勝利への確信、情報収集力において彼我のあいだに大きな開きがあったからである。ドイツ側にも小さな思惑違いが出ているが、フランス側はほとんど成り行きに任せた結果、そうなのである。

ここで再び舞台をシュピッヘルンに戻してみよう。フロッサール將軍は軍の立てなおしのため、ザールブリュッケンから第2軍団を後退させ、シュピッヘルンとフォルバックの間に置いた(8月5日)。今度の戦争が始まって以来、最大の会戦がこの高地の争奪をめぐつくりひろげられることになる。

仏軍5万5千と独軍4万3千の正面衝突は8月6日の夜明けとともに始まった。ドイツ第1軍司令官シュタインメッツはモルトケの待機命令を無視して突撃を命じた。天然の要害というべきこの高地に陣取るフランス第2軍団は地の利を活かして必死の防戦につとめた。戦いは最初、フランス側に有利に展開したが、時間を追って攻守ところを変えていく。戦いは日暮れまで続いた。

独軍による高地攻略は結果的に成功したものの、その代償は高くついた。すなわち、仏軍の死傷者2000に対して、独軍のそれは4500である。つまり、戦術上の勝利と戦略上の敗北を絵に描いたような結果といえよう。数だけをとってみると仏軍の勝ちであるが、その反面、重要拠点を失い、以後、この隘路を通しての敵地への侵入は閉ざされることになった。一

23 Niox, G., *La guerre de 1870, simple récit*. Charles Delgrave, 1896, 146 p., p. 22.

方、独軍は攻略に成功したものの損傷著しく、間髪入れずの追撃戦に移れなかった。

シュピッヘルンの戦いに対する評価は、フランス側の「負け」、ドイツ側の「勝ち」とする点で両陣営において異なるところはない。しかし、両陣営ともにその発表を渋った。フランスは陣地を奪われただけでなく、2000以上の行方不明者を出したからだ。その大多数は捕虜だった。この事実は仏兵の士気沮喪ぶりを示している。ドイツが秘密にしたのは、損傷の大きさも然ることながら、軍司令部に重大な軍規違反があったからだ。モルトケ作戦の真髄は目標に対して全軍を投入し、圧倒的に優勢な兵力をもって敵を一挙に包囲殲滅してしまうことである。この基準に照らせば、シュピッヘルンの戦いは明らかに失敗だった。シュタインメッツはまもなく更迭され、後方勤務にまわされることになる。

この戦いを通じてもうひとつだけ、この戦争の行方を占うような出来事が起きていた。それは銃と大砲の“力くらべ”である。ドイツ側が多くの死傷者を出したのは、シャスポー銃と機関銃の斉射を浴びたからだ。接近戦ではフランス側に利のあることが証明された。また、高地に陣取る仏軍が最終的に撤退せざるをえなくなったのは、激しい敵砲火を浴びたせいである。つまり、距離をおいての戦闘では、射程の長いクルップ砲がまざまざと威力を発揮したのだ。

独軍が仏軍を上まわる犠牲を出した戦闘はこれ一度きりだった。普仏戦争を全体として見た場合、ドイツにとってあまりに一方的な戦いとなったため、このときの、ドイツ側にとって取るに足りない「敗北」をことさら強調しなければならないほどだったのである。

第2章 アルザスの戦い

ーウィサンブール（8月4日）とフレッシュウィレル（8月6日）ー
メッスの仏軍大本営では、皇帝、陸相ルブーフ、皇帝付秘書官ピエトリ、

そして作戦地域の将校らがテーブルを囲んで作戦指導にあたっていた。8月4日の昼食中、外部からの通信を一括して扱っていたピエトリの許に一通の電文が届けられた。その電文には、仏軍主力の一角で、マク＝マオン元帥麾下のライン軍のアベル・ドゥエー旅団がウィサンブール²⁴で惨敗し、潰走中と記されていた。アベル・ドゥエー將軍²⁵は敵弾に斃れたとあった。

ドゥエー將軍は、アルザス防衛を受けもつ第1軍団配下の第2師団8600人の長である。大砲は僅か18門しかない。三方を山で囲まれたウィサンブールの町は東方のみに平地が開け、ここから道路と鉄道がドイツ国境に通じている。その意味でここは戦略上の要衝であったが、第1軍団の守備範囲が広がったこともあり、町そのものを守っていたのは僅か1個大隊のみだった。その手薄な点を突かれたのである²⁶。守備隊は、偵察の不備のせいで敵の大軍の接近に気づかなかった。独軍は第3軍4万5千、すなわち、バイエルンとプロイセンの混成軍で、128個大隊、102個騎兵中隊、80個砲兵隊（大砲144門）という大陣容だった²⁷。

急を知って駆けつけたドゥエー師団が激しく応戦し、敵に1550人の損傷を与えたが、自軍も1600人の死傷者と700人の捕虜を出して、結局、敗退するにいたった²⁸。

戦闘のある局面では仏軍の1個大隊のみでもって、バイエルン1個軍団およびプロイセン2個軍団を相手に5時間ももち堪えたとの武勇伝も残っ

24 ウィサンブールはアルザス州の東北の角にある町で、筆者はかつてここを訪れたことがある。国境のこの小さな町はこのときの戦災でやられたらしく、石造家屋は多くない。普仏戦争を物語るものはほとんど残っていないが、わずかに、町外れの公園の一角に立っている石碑のみがこの日の惨劇のもようを伝える。

25 アベル（1809－70年）は、のちにベルフォールの英雄となるフェリクス・ドゥエー將軍の7才年上の兄である。

26 Rousset, Léonce (Lieutenant-Colonel), *Histoire populaire de la Guerre de 1870-71*, s. d., 904p., pp.140-142.

27 Moltke, *ibid.*, pp.15-16.

28 Rousset, *ibid.*, p. 154.

ている。ドイツ第3軍の司令部がウィサンブル戦の直後にプロイセン王宛てに打った電文は「大流血の、しかも嘆かわしい勝利」²⁹、とそっけない記述だった。独軍の損失も甚大だったのである。戦闘は午前8時半から午後3時まで町の中心部でくりひろげられたため、多数の家屋が被災した³⁰。仏兵はスルツ街道をまっしぐら西方に逃げのび、マク＝マオン軍団の本隊と合流した。

仏軍の防御ラインが長く延びすぎたツケがここに出ている。この事實は、仏軍側に作戦計画がほとんどなかったことを物語る。つまり、どこで合戦するかを敵の主導に委ねてしまったのだ。防御戦線がこうであったから、仏軍の弱点はどこでも同じ、ウィサンブルは連戦連敗の序曲にすぎなかった。マク＝マオン指揮下の第1軍団のうち、ドゥエー師団を除く他の4個師団はヴォージュ山脈の山間部、東の山麓、平地の拠点、ストラスブルに分かれて守っており³¹、たとえ、ウィサンブルでの異変を知らされたとしても、手の打ちようがなかったであろう³²。

おそらく、モルトケ自身、敵のあまりの無策ぶりに戸惑いを覚えたのではあるまいか。ウィサンブルの戦いは仏軍にとって偶発事だったかもしれないが、独軍にとってはそうではなかった。モルトケは、前々日にザールブリュッケンで戦端が開かれた以上、ここで再会戦を窺うドイツ第1軍を支援するためにも、第2軍（中央）と第3軍（左翼）も当初計画どおり、敵と会戦させる心づもりでいた。入念な敵地偵察のおかげで仏軍の弱点が

29 Sordet, *ibid.*, p.75.

30 Howard, *ibid.*, p.102.

31 第1軍団が陣容を整えたのは8月2日である。フェリックス・ドゥエー將軍の第7軍団はベルフォールで、ファイイ將軍の第5軍団はピッチュで、マク＝マオン元帥自身はフレッシュウィレルでそれぞれ防備態勢を敷いていた。マク＝マオン元帥は、ドイツ軍のアルザスへの侵入はさしあたってないと思なしていた。彼に懸念があったとすれば、それはウィサンブルではなく、ストラスブルだった。

32 Howard, *ibid.*, pp.100-101.

アルザスにあることがわかり、ドイツ第3軍の総司令官フリードリヒ＝カールに対し8月3日、出撃を命令したのだった。

ここで注目すべきは、遅れに遅れていたバイエルン軍団がついに到着し、参戦したという事実である。彼らの多くは予備役兵で、急に召集されて取るものも取らず前線に駆けつけた。当然、食糧などの用意がなく、途中の停車駅で住民から食べものを受け取るような始末だった。到着が遅れたうえ、そんな状態にあったものだから、同じ第3軍を構成するプロイセン、ヴェルテンベルク、バーデンの各陣営はバイエルン軍団をけっして快く思っていなかった。だが、ウィサンブールでの勝利が、それまで各軍のあいだに燻っていたわだかまりを一掃した。

アルザスでの戦いはこれでケリがついたわけではなく、ようやく幕を開けたにすぎない。マク＝マオン軍主力はウィサンブールの南西15キロメートルのウェルトにいたが、マク＝マオンがいつウィサンブールの惨劇を知ったかは定かではない。たぶん、ヴォージュの峠を越して逃げてきた敗残兵と合流したとき（5日未明）であろう。それまでのマク＝マオンの関心は、やがて始まろうとするロレーヌでの二度目の会戦に向けられていた。ウィサンブールで破れ目が生じたことを知った元帥の驚きはいかばかりだっただろうか。北西方向を気にしていた彼にとつぜん、東方向から脅威が生まれたのだから。マク＝マオンの関心は、フォルバックで待機するフロッサール軍団の動向であった。

フォルバックは、ザールブリュッケンから山を越えて最初に出くわすフランスの町である。シュピッヘルンを陥落させた独軍が次に狙うのがこの町で、このときの戦い（8月6日）は連続しており、「シュピッヘルンの戦い」とも、「フォルバックの戦い」ともいわれる。そこは、アルザスのマク＝マオン軍団から西方65キロメートル、メッスの仏軍大本営から東方60キロメートルの地点に位置し、どちらから救援に駆けつけるにしてもゆうに2日はかかる。しかも、マク＝マオン軍団は背後に敵が迫っていたた

め、フォルバックへ救援に駆けつけるどころではなくなっていた。マク＝マオンは8月6日の戦闘を想定していなかった。むしろ、この日の戦いが戦争そのものの帰趨を決定することになること、も³³。ウィサンブールの戦いもそうだったが、マク＝マオンのような勇将にしては実に間延びした対応である。要するに、彼の許に情報がなかったのだ。

同日午前6時ごろ、マク＝マオン軍団3万5千人はウェルトとフレッシュウィレルのあいだの畑地でドイツ軍と遭遇。相手は、ウィサンブールの勝利ののち追撃戦に移ったプロイセン第5軍団、バイエルン第1軍、第11軍団、ヴェルテンベルク師団の総勢14万人。戦力において4倍の開きがある。よほどの地の利または奇襲でもないかぎり、兵力で勝る側が優位に立つのは必至である。はたして、当時の戦闘配置図を見ると、2列になって東方を向く仏軍が独軍によって北と東から包囲される形になっている。形勢は一目瞭然である。

仏軍は果敢に戦いを挑んだ。とくに激しく抵抗したのは、ウェルトで戦闘に参加したアルジェリア歩兵である。植民地出身の兵士が戦闘で消耗品として使われるのはいつものことだが、とくに、ニーデルヴァルトの森で敵騎兵団と戦ったアルジェリア第2連隊は何度も突撃させられたため、戦闘前に兵数2000余だったものが、夕方、退却を命じられた時点で440ほどに減っていた。他は死傷者と行方不明者である³⁴。

8月7日、サヴェルヌまで退却したマク＝マオン軍団は総勢2万に、つまり、元の兵力の6割以下になっていた。同軍団はリュネヴィルとヌフシャトーを経由してシャロン兵営をめざした。そこで、アルザスとロレーヌの戦いで一発の銃弾も発射することなく退却した第5軍団と第7軍団と

33 Zurlinden (général), *La guerre de 1870-1871, Réflexions et souvenirs*, 1904, Hachette, 313 p., p.62.

34 Zurlinden, *ibid.*, p.62.

合流することになる³⁵。

ドイツ第3軍は8月10日にサヴェルヌに進出し、ヴォージュ山脈を越えて12日にサール＝ユニオン、サールプルーを経由し、16日にナンシーに到達し、この町を占領した³⁶。ウィサンブールの陥落後、第3軍のうち、ヴェルダール將軍の指揮下に置かれた一部は本隊と分かれて南下し、ストラスプールの包囲にとりかかる（16日）。アルザスのこの州都は勇猛に応戦し、9月28日の降伏まで1ヵ月半ものあいだを戦い抜くのだ。絶え間ない砲撃によってほとんどの家屋が被災し、住民1500人、守備隊3000人の犠牲を出したすえに武器を置くことになる³⁷。

第3章 ロレーヌの戦いーフォルバック（8月6日）ー

アルザスでマク＝マオン軍団がドイツ第3軍に立ち向かっている最中に、ロレーヌでも戦鬨の第2幕が切って降ろされようとしていた。仏軍はメッス東方の国境付近に第2・第3・第4軍団と近衛兵を配置し、そのほか、遅れてメッスに到着した第6軍団ー不完全な編成だがーがいた。

8月6日、シュピッヘルン陥落のあと、フロッサール將軍指揮下の第2軍団はシュティリンク平地で、次いでフォルバックでドイツ第1軍と第2軍と渡りあっていた³⁸。

われわれは前に、シュピッヘルンの戦いでドイツ第1軍司令官シュタインメッツに軍規違反があり、独軍が大きな損失を蒙ったことをみてきた。このとき仏軍側でも似たようなことが起きている。つまり、フロッサール軍団の後ろに控えていたバゼーヌ指揮下の第3軍団は、ルブーフの再三の催告にも

35 *Ibid.*, p.65.

36 *Ibid.*

37 *Ibid.*, p.66.

38 *Ibid.*, p.68.

かわらず支援に向かわなかった³⁹。フォルバックのフロッサールはルブーフとバゼーヌ宛ての電報で援軍を送るよう矢の催促をしたが、バゼーヌは僅か数キロメートル離れたフォルバックに兵を送ろうとはしなかった。電文に抛らずともこの距離であれば、砲声だけで激戦が行なわれていることに気づかないはずがない。だが、バゼーヌはどういうわけか動かなかった。フォルバックで激闘が始まった最初のうちは、数で優る仏軍2個師団に分があった。ここにバゼーヌの持ち駒の3個師団のうち1個師団でも駆けつけていれば、仏軍が勝利をおさめた可能性が高い⁴⁰。

数時間たつと、増援を受けはじめたドイツ陣営に厚みが出てきた。かくて独軍側が攻撃のイニシアティヴをとるようになる。シュティリンクとエッティンゲンでの攻防戦で両軍ともに一進一退を繰り返したのち、午後になると戦局ははっきりドイツ側の優勢に傾いていく⁴¹。激戦は夕方7時すぎまで続いた。戦いが決したのは7時ごろ、フォン・デア・ゴルツ將軍率いるドイツ第13師団がフォルバックに到着したときである。デュラク中佐とアルノー少尉が率いる仏軍小隊は急ごしらえの塹壕に立てこもり、なおも2時間ほど抵抗し、味方軍団本隊の退却を助けた。同軍団は夜半になってようやくサルグミーヌに逃げのび、ここで、同じくアルザスから退却してきたマク＝マオン軍団と合流した⁴²。

フロッサール軍団が惨敗した原因の多くがバゼーヌにあるのは明白である。自分より格下のフロッサールが日頃、皇帝の覚えのよいことに嫉妬を感じたバゼーヌは、フロッサールが援軍派遣を要請してきたとき、次のように叫んだといわれる。

「3年前、あいつはフォルバックの陣地を考究し、ここは戦いをする

39 Howard, *ibid.*, p.91

40 Zurlinden, *ibid.*, p.68.

41 *Ibid.*, p.69.

42 *Ibid.*, p.71.

のにもってこいの場所だと言ったことがある。なるほど、彼は今、その場所で戦いをしているのではないか。」⁴³

これは評論家の言で、とうてい戦闘当事者のものとは思えない。しかし、彼がそう述べたことはまんざら嘘でもないようだ。続く9月～10月のメッス攻防戦におけるバゼーヌの言動はこのときとまったく同じであるからだ。仏軍首脳部に意思疎通がなかったことだけははっきりしている。軍隊では実戦に臨み、しばしば将官相互の感情的齟齬が尾を引いて重大な結末を招くことがある。軍の最高責任者たる者は、そうしたことを読み込んだうえで作戦計画を練らねばならないということだろう。

メッスの大本営は6日午後1時、マク＝マオン軍団とフロッサール軍団がともに戦闘状態に入ったという報を受けた。夕方6時には双方から「危機に瀕す」という旨の電文が届いた。大本営にはこれ以外に詳しい情報が入らなかった。これはナポレオン三世の不安を掻き立てるに十分だった。そこで、ナポレオン三世はクレネンベルク大佐をフォルバックの戦況査察に派遣した。午後7時、同大佐からの電報が届いた。「どの道路も潰走してくる兵隊と傷兵で混雑している」⁴⁴とあった。つづいて午後8時、マク＝マオン元帥より入電。「今朝、強力なる敵軍の大部隊の進撃を受け、わが軍は破れ、兵員ならびに兵器に甚大なる損傷を蒙った」⁴⁵、と。

一方、フロッサール軍の動静も不明なため、バゼーヌ元帥はカスタニー、ムトードン指揮下の2つの旅団を救援に送った。しかし、その到着前にフロッサール軍はシュピッヘルン高地を撤退しはじめていて、両旅団は会戦に間に合わなかった。このときの戦闘配置図を見ると、仏軍は東・北・西の三方から包囲されていて、この戦いもまもなく決着のつくことが読み取れる。仏軍は南西方向、つまり街道沿いにメッスをめざすしかな

43 *Ibid.*, p.72.

44 *Ibid.*

45 *Ibid.*

い。独軍は、ロレーヌ州最大の要塞メッスに敵の大本営があることは百も承知しており、早晚、この町を包囲するつもりでいた。

アルザスとロレーヌ2つの戦線での敗報に接した仏軍大本営は意気消沈し、早くも戦犯探しを始める有様であった。参謀総長ルブーフは8月7日に辞表を提出し、以後、いっさい口をきかなくなってしまった。敗報は実際の何倍にも膨らんで、軍全体の崩壊のような効果を生じた。前景気が大きかっただけに、反動も大きかったのだ。従兄弟のジェローム・ナポレオン公爵、ルブーフ元帥、ルブラン將軍らを集めて御前会議が始まった。皇帝は軍全体をサン＝タヴオーに集め、敵の右翼を攻めたのちシャロン＝シュル＝マルヌに撤収すると言いだした。シャロンまで退くということはパリに戻るのとはほとんど変わらない。諸将は、この退却が人心に与える影響を考慮した。すなわち、国民世論は黙っていないだろうし、議会野党も手ぐすね引いて待っている、と言って皇帝に翻意を迫った⁴⁶。

結局、皇帝は譲歩し、8月8日から10日にかけて第3軍団と第4軍団をニエの後ろに退かせ、近衛兵を予備軍とした。フォルバックから後退してきた第2軍団は次の戦闘に備え、メッスで再編・休養することになった。だが、パンジュで開かれた10日の軍首脳会議で皇帝はまたもや、メッスを經由してシャロンへ軍を退却させるという元の主張に戻ってしまう。じっさい、11日に軍はメッスの近くにまで移動した。ところが、翌12日になると、皇帝はまたもや態度をぐらつかせ、軍をメッスに駐留させると言いだした。そして、自分はライン軍総司令官から降り、代わりにバゼーヌ元帥を指名した⁴⁷。

このような皇帝の朝令暮改の措置は、それだけ敗北から受けた衝撃が大きく、心中において激しい揺れが生じていたことを意味する。軍人のあいだでバゼーヌへの信望がないことを知りつつ、彼を総司令官に据えたのも

46 *Ibid.*, p.73.

47 *Ibid.*

なんとも理解しがたいところである。皇帝自身が何の記述も残していないため、なぜバゼーヌなのかはわからない。これはあくまで推測の域を出ないが、筆者なりに推理してみることにしたい。

皇帝はそもそも今度の戦争に賛成ではなかった。閣僚と軍の一部に執拗に主戦論を唱える者がいて、彼らが新聞と世論を焚きつけて不用意にも戦争を始めたのだ。だから、自分に責任はない。軍略に疎い自分は退いて、局面打開を軍人に任せたほうがよからう。皇帝が一旦、(軍再建のため) シャロンへ撤退する道を選びながら、最終的にメッスに留まることに同意したのも、皇帝に迷いがあったからである。しかし、メッスに留まればとうぜん敵と戦わねばならないことになるが、そうした覚悟があったかどうかも疑わしい。彼の本心はパリに戻ることであったが、それはできないと感じたのだろう。つまり、「敗軍の総帥」という汚名を着たままパリに戻ったのでは、市民がそれを許さないだろう、体制が転覆されるかもしれない、と。

たしかに、当時のパリに謀反の動きがあったのは事実だ。だが、この不穏な空気をことさら懼れる態度は独裁者のものではない。ナポレオン三世とナポレオン一世はこの点で決定的に違う。

伯父ナポレオンはたとえ前線で窮地に陥っても、パリに平気な顔をして帰還した。統領時代のエジプト遠征がそうであったし、もっと顕著な例では、ロシア戦役時の大潰走もそうであった。50万の大軍を率いて颯爽と出陣しながら、そのほとんど全部を見殺しにして単身でパリに戻ってきたのではなかったか。そのような窮地に追い込まれても、ナポレオンは最終的に軍を立て直したのだ⁴⁸。

しかし、ナポレオン三世には伯父の傲岸・勇気・統率力が欠けていた。ナポレオン三世は難局に臨んでどっちつかずの態度をとり、その結果、困難な立場に追いやられると、勝手に身を退いてしまうことをこれまでいく

48 両角良彦『1812年の雪 — モスクワからの敗走 — 』筑摩書房、昭和55年、240頁を参照。

たびも繰り返してきたのである。

世論を気にする権力者で、偉業を成し遂げた者はいない。世論というのは本質的に気紛れで、状況次第でどうにでも動くものである。権力者が国家存亡にかかわる重大事をなすにあたり世論にすり寄ることは、「砂上の楼閣」に身を寄せるのに似ている。事がうまく運んでいるときの世論は拍手喝さいを惜しまないが、困難が訪れるとサッと離れ、自分らはもともと無関係だと言いはり、被害者然とした態度に変わるのである。権力者たるもの、世論は考慮すべきだが、それに責任を負わせてすむものではないことを肝に銘じておかねばなるまい。

メッスで何をしようとするつもりなのか、進むべきか、はたまた退くべきか、皇帝に決心がつかないまま数日がすぎた。戦いの主導権は完全に敵側に握られ、時間の空費は取り返しのつかない事態を生む。もはや、仏軍陣営は憂色濃い。

アルザス＝ロレーヌ戦線で連戦連勝をおさめた独軍はどう動いたか。同軍は8月6日の勝利後にナンシーを制圧し、仏軍を追跡した。8月10日、仏軍はニエ川⁴⁹を越えた。モルトケは第1軍と第2軍に対し、連携をとりつつ敵を殲滅せよと命令⁵⁰。13日、ドイツ第1軍はニエ川に、第2軍はセーユ川⁵¹にそれぞれ到達。どちらもほんの一步の差で仏軍を取り逃がした。翌14日、第2軍は第1軍と連携をとりながら前進し、モーゼル川をめざす⁵²。このような独軍の足取りをみると、ナポレオン三世がフランス第

49 ロレーヌを流れる川で、ドイツ領ザールでモーゼル川に合流する。ニエ川はフランス＝ニエ Nied-françaiseとドイツ＝ニエ Nied-allemandeに分かれ、メッスの東方20キロメートルに位置する町コンデ＝ノルタンConde-Northen付近で合流する。フランス軍が渡河に成功したというのはフランス＝ニエを指す。

50 Zurlinden, *ibid.*, p.76.; Moltke, *Correspondance militaire du maréchal de Moltke*, édition Charles Lavauzelle, tome 1, p.272.

51 セーユ川はモーゼル川とフランス＝ニエ川の間を平行して流れ、メッスでモーゼル川と合流する。

52 Zurlinden, *ibid.*, pp.76-77.

1軍団と第2軍団に対してニエ川からメッスへの退却命令を下したのはあながちまちがってはいなかったことを意味する。もし両軍団がニエ川に踏みとどまっていれば、そこで独軍主力によって包囲・殲滅されてしまった可能性が高いからだ。仏軍にとってメッスに辿りつくまではよかった。だが、ここで肝心要の皇帝に迷いが出てしまい、その指示が二転三転したうえ、挙句のはてに責任放棄してしまったことが軍と皇帝自身に墓穴を用意することになった。

第4章 八月政変

銃後のパリの様子を見てみよう。8月5日の夜までパリに前線での戦況について何の情報も入らなかった。住民は朗報を今か今かと待ちわびていたが、前線からは手紙はむろん、電信ひとつ届かなかった。戦場に多数の中立国の従軍記者が入り込んでいたはずだが、情報が入らないため、パリの新聞も沈黙したままであった⁵³。5日の夕方になると、だれかが情報をもっているのではないかという不安心理に駆り立てられた住民は思い思いに街頭に繰りだす。しかし、だれも何も知らず、街路の家壁に古びた布告や檄文が貼られているのを見出すだけだった。

第一報が入ったのは翌6日の午前9時である。ボーヴォー広場の内務省中庭に集まっていた群衆は官吏の口からウィサンブルでの敗北を知らされた。つづいて公式文書が新聞記者に配られる。それには、「3個の歩兵連隊と軽武装の1個騎兵旅団が兵力に優る敵兵に襲われ、数時間の戦闘のち撤退中」⁵⁴とあった。すべての者がこれを「敗北」と受け止めた。

太陽の照りつける正午近くになって別の情報が流れた。それによれば、

53 Wachter, A., *La guerre de 1870-71; Histoire politique et militaire*, E. Lachaud, 1873, 510 p., p.211.

54 Wachter, *ibid.*, p. 212.; Cf. Girard, Paul, *La guerre de 1870-71, la république du 4 septembre*, Avignon, François Séguin, 1911, 157 p., p. 46.

マク＝マオン軍が攻撃に転じ、敵前線を突破し、ウィサンブールの雪辱を果たし、プロイセンは緒戦勝利の厳しい贖いを受けたというのだ。なんでも、40門の大砲と2万5千の捕虜が仏軍側に落ち、その中にプロイセン王太子が含まれているということだった。しかし、味方の損失も大きく、ドゥエー將軍が捕虜となったとある⁵⁵。なんとも混乱した情報であり、どのような解釈も可能だ。不安心理が働けば凶報として、愛国的情熱が優れば吉報として受け止めることができる。

ところが、内務省はこの噂の当否を確かめる術をもたなかった。じっさい、情報をもたなかったのだ。敵が意図して流したデマということもじゅうぶん考えられる。ともあれ、政府に求められていたのは、速やかに閣議を開いて、沸騰しつつある世情への対策を練ることだった。サン＝クルーから急遽パリに戻ったユジェニー皇后の参席を得てその日の夕方に閣議がもたれた。途中で刻一刻と公式の情報が政府の元に届き、マク＝マオン軍の敗退とシュピッヘルンでの敗北が明らかになった。閣議の結果、政府は人心を鎮めるため適宜、布告を出すこと、パリ防衛に着手すること、籠城宣言を発すること、立法院を11日に繰りあげ召集することが決まった。この政府布告は直ちに貼り出された⁵⁶。それは、フランスにまだ勝機は残っており、国民は冷静に対処するよう訴えると同時に、30才から40才までの成年男子を国民衛兵として徴用することを告知した⁵⁷。

6日の午後までは民衆の憤激はまだ敵に向けられていたが⁵⁸、夕方を迎えるあたりから次第に矛先は政府および帝政に向けられるようになっていく。騒ぎを大きくしたのは共和派の代議士とボナパルト派の元老院議員た

55 Wachter, *ibid.*, p.213.

56 8月7日午前11時付で摂政皇后ユジェニーの名で布告が貼り出された。Cf. Girard, P., *op. cit.*, p.53.

57 Wachter, *ibid.*, p.214.

58 *Ibid.* 6日午後、法務省庁舎の前に集まった群衆に対してオリヴィエ首相が二度までも姿を現して、「誤報を信じるな、戦おう」と檄を飛ばした。

ちである。奇しくも、まさしく正反対の立場からだが、彼らはオリヴィエの責任を追及する点で一致した。右翼と左翼が一致すれば、中道派—右と左のニュアンスはあったが—も引き摺られていくのは火を見るより明らかだった。

最初に動いたのは左翼である。ジュール・ファーヴル、ジュール・シモン、カミーユ・ペルタンら共和派議員は立法院議長シュネーデルを訪れ、議会の開会を急ぐこと、総司令官から皇帝を降ろすことを要求した。議長はその要求の前段部分のみを認め、開会を2日ほど早めることに同意した⁵⁹。

こうして、立法院は8月9日に始まった。開会と同時に方々の席から内閣を責める声が挙がった。3週間前に内閣の訴えに呼応するかたちでフランスを戦争に引き摺っていった責任などこ吹く風の風情で、議会は内閣非難に明け暮れた。もはや内閣総辞職は当然といった雰囲気さえ生まれた。オリヴィエには気の毒であった。彼は意にそまない戦争にさんざん抗ったものの、全体の圧力を受けて最後に開戦に賛成したばかりに、敗北の責任まで問われてしまったのである。彼自身、二・三日前から始まった倒閣の動きをまんざら知らないわけではなかったが、自ら責務を投げ出そうとする気にはなれなかった。

ジュール・ファーヴルは前日のうちに用意した提案文を読み上げた。それによれば、事実上失権した皇帝から権力を剥奪し、議会が指名するところの全権委員会に委譲せよというものだった⁶⁰。エルネスト・ピカールもファーヴルに同調し、パリの人民は、武器が与えられなければ公安委員会を組織するかもしれないと述べた。しかし、すっかり自信をなくしたとはいえ、ボナパルト派が多数を占める議会で、こうした提案は通るはずなかった。とはいえ、彼ら共和派の激越な態度の中に民衆の圧力を感じとったボナパルティストは、何とかしなければ本当の恐怖政治が起こるかもし

59 *Ibid.*, p.215.

60 *Ibid.*, p.220.

れないと考えるようになる。これまで迷っていた中道派も、共和派の傲慢な態度を前にして行動の必要性を感じた。オリヴィエが自ら辞職しないとすれば、投票によって決するしかない。かくて立法院は内閣の不信任決議を投票にかけることになった。不信任案は反対6票のほぼ全員一致で可決された⁶¹。

内閣不信任案可決の2時間後に、パリカオ將軍を首相とする新内閣が誕生した。内務大臣アンリ・シュヴロー、建設大臣ジェローム・ダヴィッド、商業大臣クレマン・デュヴェルノワ、外務大臣トゥール＝ドーヴェルニュ、財務大臣マニュ、法務大臣グランペレ、公教育大臣ブラームの面々である⁶²。

パリカオの名はすでに前日から挙がっていた。彼が首相になれたのは摂政皇后ユジェニーの“おめがね”に適ったためである。パリカオPalikaoは1860年9月の中国出征において、仏英連合軍を率いて北京近郊の「八里溝」で清国軍を撃破した勇将クーザン＝モントーバン伯爵（1796－1878年）の別名である⁶³。彼の輝かし軍歴が戦時体制を強化するように思われたし、この人気將軍を登用すれば民衆の不満を抑えることも見込めるだろう。また、もし民衆暴動が起これば、劍の力でそれを抑えることも可能だった。新内閣に与えられた使命はこのほか大きかった。立法院野党、元老院議員、民衆のすべてに受けのよい内閣はけっこうだが、そうした内向けの観点からつくられた新政府ははたしてあらゆる者の期待に応えることができるだろうか。為政者が世論の圧力を感じて政治の舵取りをとるのは、開戦決定に続いてこれで二度目だった。さしもの帝政もかくまで弱くなったものである。政府の交代よりも大切なことは外敵に勝利すること

61 *Ibid.*, p.221.

62 *Ibid.*, p.222.

63 このときヴェルサイユ宮殿を模して造られた円明園が焼失した。火を放ったのは英軍兵士だといわれている。

あったはずだが。

議会でのこうした政権交代の動きと並んで、院外でも騒動が起きていた。多数の労働者が立法院の外、セーヌ川を挟んだコンコルド広場を占領し、そこから「オリヴィエを倒せ！」の氣勢を挙げていた。パリの民衆のこうした圧力が野党共和派を勢いづけたことは否定できない。民衆は強力な政権でもって抗戦運動を組織することを願っていたのであって、必ずしも体制倒壊をめざして行動したわけではない。革命よりも、当面の戦争に勝利することを求めていたのだ。

しかし、一部のフラクシオンは本気で革命を考えていた。オーギュスト・ブランキの一派がそれである。彼は1870年1月のヴィクトール・ノワールの葬儀事件⁶⁴に連座して責任を問われ、そのため国外に逃亡していたが、祖国の運命の急変を感じて密かに亡命先のブリュッセルから駆けつけた。彼は、あの葬儀（1月12日）に集まった10万大衆のことを想起し、今こそ打って出るべき時だと悟った。数回にわたる同志との会合ののち、8月14日を蜂起決行日と決めた。ブランキ派はラ・ヴィレットの消防隊本部を襲って武器を奪い、この率先的行動をもって蜂起の狼火としようとした。

8月14日は日曜日だった。ラ・ヴィレットの大通りには露店や香具師や見世物が並び、憂鬱な戦況の憂さを紛らせようと外出してきた人々で雑踏していた。およそ、蜂起に相応しくない雰囲気だった。午後3時半、百人

64 ヴィクトール・ノワール事件とは、筆禍がもとで銃殺された記者ノワールの葬送行列がデモ行進のような状態になったのをみた帝国政府が軍隊を出動させ、弾圧した事件を指す（1870年1月）。パスカル・グルッセ編集主幹の新聞『マルセイエーズ』に、皇帝の異母弟ピエール・ボナパルトを侮辱する記事が掲載された。立腹したピエールはグルッセに決闘を申し入れた。そこで1月10日、ヴィクトール・ノワールらが決闘作法の取り決めのためピエール邸を訪れたとき、ピエールはいきなり発砲し、ノワールを殺害してしまった。この野蛮な行動にパリ市民が憤激し、葬儀に集まって来たのである。この行進が暴動に発展しないよう、ドレクリューズやロシュフォールらは慎重に行動したが、それでも処罰は免れなかった。おまけに、ピエール・ボナパルトは3月21日の裁判判決で無罪放免になったため、民衆の遺恨は深く沈殿することとなった。

ばかりの労働者の一団が静かにゆっくりと消防隊本部の方向に近づいた。ここを襲って武器を得るもくろみである。彼らは、パリ市民から敬愛されていた消防士に危害を加えるつもりはなかった。一方、消防署にしてみれば、不審な一団に武器を引き渡す謂れはなく、抵抗の意思表示をしたため、歩哨が拳銃で撃たれて負傷した。叛徒たちはこれ以上、実力行使を続けるつもりはなかったので、押し問答が始まった。そこに、騒ぎを知って駆けつけた市警団との間に撃ち合いが始まった。数で劣る警察側は死者1名、負傷者2名を出して退去した。叛徒たちは再び説得によって消防士の武器を奪おうとしたが、こうした生ぬるい措置で目的達成できるはずもなかった。失敗と悟った叛徒たちは外側のブルヴァールを通してベルヴィル方向に立ち去っていく。「共和政万歳」、「プロイセンをやっつけろ」、「武器を取れ」の叫び声が挙がっても、城内平和を第一と考える民衆の側からは何の反応もない。民衆は、目の前で起きた突発事に呆気にとられて傍観するだけだった。ベルヴィルという革命的雰囲気漂うこの街区で謀反の訴えがまったく通じなかったという事実のみが革命派の上に重くのしかかった⁶⁵。

かくて、ブランキの蜂起は失敗した。彼は再び身を隠すことになる。7ヵ月後のパリ＝コミューンで指導者となるウードとブリドーをはじめ、数名がこの事件で逮捕された⁶⁶。彼らは9月4日の革命とともに保釈されることになる。このエピソードは当面の政局にほとんど影響を与えなかったようだ。しかし、民衆の爆発のエネルギーが払底したわけではない。今ひとつの衝撃が加われば大爆発を起こす可能性は残った。

(つづく)

65 Soria, Georges, *Grande histoire de la Commune*, 1970, Club Diderot, 379p., tome. 1: Origines, pp.176-177.

66 *Ibid.*, p. 177.